

エッセー

教員・研究者の共同を促し成長させてくれる 全カリ総合

経済学部教授 菅沼 隆

私が立教大学に着任したのは1997年4月であった。全カリ総合科目の授業が始まった年である。新任教員の私には「全学の教員が責任を負う」という全カリのシステムが理解できなかった。

2001～02年度には全カリ総合部会の委員となった。当時の全カリ部長は社会学部の庄司洋子先生、総合部会長は01年が理学部の齋藤宏先生、02年が経済学部の名和隆央先生であった。全カリの会議は18時以降に開催されることが多く、しかも長かった。皆、熱心に議論した。当時の総合部会の委員の先生方は、苦労を共にした友人となり、その後も学内の様々な機会に親しくお付き合いさせていただくことになった。当時の私は全カリの理念に全面的に共感していたわけではなく、部会メンバーの先生方に疑問をぶつけながら、試行錯誤で運営に従事していた。そのなかで、全カリは教員が「やりたいと思える授業」を作ることを容認してくれるシステムであることを次第に理解していった。そして、部会メンバーとして、時代の変化を先取りしたいいくつかの新しい総合科目を提案したが、齋藤部会長らがそれを積極的に受け止めて下さった。科目名の決定、科目目的と授業構成の作成、講師探しなど、苦労は多かったが、授業を作る楽しみを味わえたことは、教員としての私を成長させてくれた。

2012～13年度は全カリ副部長として教務を担当した。2013年度に展開した全カリ科目は、総合が593コマ、言語A（英語）が2141コマ、言語Bが905コマ、日本語が44コマ、合計3683コマあり、それだけの授業が展開され、担当する教員の数も多く、受講する学生も多かった。そのため毎週何らかの教務案件が発生し、臨時の会議を開くことが常態であった。講師の交代も頻繁で、兼任講師の採用承認審査も毎週のように行った。毎日「湧いてくる」教務案件をその場でこなす生活であった。案件が多すぎて、どのような教務案件があったのか、思い出せない。この2年間は成長を味わう余裕もなかった。青木康全カリ部長の優れたリーダーシップと優秀な全カリ事務室職員の支援により、職責を全うすることができた。

25年前も現在も、立教の全カリは他大学の追随を許さない優れたシステムである。他大学の友人に全カリのシステムについて説明すると「どうしてこんなことが可能なのか」と驚嘆の声が返ってくる。このシステムが30年近く維持されてきたことは驚きに値する。その秘密はどこにあるのだろうか。私は全カリが教員の共同を促すことにより、教員としても研究者としても成長させる効果があるからではないかと考える。

全カリならではの科目群に総合B（現在のコラボレーション科目）がある。一つの科目に3人の教員コマがつく、贅沢な科目である。それは共同が必然的に形成される科目であり、研究者としての視野の拡大と、教員としての学生の成長を実感できる場である。

2000年に、総合B「北欧を知る」を担当した。当時経済学部と同僚だった石原俊時先生（現在東京大学教授）をコーディネーターとして、社会学部の木下康仁先生、庄司洋子先生、コミュニティ福祉学部の橋本正明先生、他大学の北欧研究者とともに授業を担当した。他学部・他大学の先生と共同で授業を作る経験ができたことは大きな収穫であった。また、他学部の学生を教える経験も新鮮であった。当時、私は北欧に行ったことがなかった。この授業がきっかけで、「北欧を知る」の教員グループで科研費の研究プロジェクトを結成し、2001年の夏に、初めてスウェーデン、デンマーク、ノルウェーを訪問した。そこで北欧三国の違いを実感し、特にデンマークに関心を抱いた。2003年度に研究休暇を得た際は、デンマークを留学先に選び、ロスキレ大学の客員研究員として滞在することになった。以後、私はデンマークの社会政策を研究するようになった。総合B「北欧を知る」は、翌2001年度も開講された。

石原俊時先生が立教を離れた後、2005年度に私がコーディネーターとなり総合B「北欧を知る」を開講した。木下康仁先生、庄司洋子先生、橋本正明先生、同じくコミュニティ福祉学部の河東田博先生、法学部の小川有美先生とともに授業を作った。学外から多くのゲストスピーカーを招いた。その記録は立教大学社会福祉研究所（2007）『立教社会福祉研究』27号に掲載した。また、2009年度には小川有美先生がコーディネーターで、図書館が提案した総合B「北欧に学ぶ」に参加させていただいた。さらに、2013年度、2014年度に経営学部の尾崎俊哉先生をコーディネーターとして、コミュニティ福祉学部の安松幹展先生（現在はスポーツウエルネス学部所属）とともに総合B「北欧モデルの可能性」を担当した。総合Bで共同した先生方とは非常に親しくお付き合いさせていただいた。今でもその関係は続いている。

2013年度には立教大学社会福祉研究所を提案部局として総合B「自立と福祉」を開講した。コーディネーターは河東田博先生で、当時の福祉研の主要メンバーが全員参加した。この企画は当時経済学部助教の田中聡一郎氏（現在、駒澤大学准教授）の力に与るところが多い。私はスポットで2回担当する予定であったが、企画が面白く、結果としてすべての回に参加した。

全カリを教員が支持してきた大きな理由は、全カリが教員の共同を奨励する装置を内包しており、研究者としても教育者としても成長できるメリットが感じている点にあるであろう。

すがぬま たかし